特集　福祉大会と福祉作文

第33回 寒川町社会福祉協議会福祉大会

昨年12月10日（土）、福祉大会は無事に開催の運びとなりました。来場者300名という盛会の中、寒川東中学校吹奏楽部による演奏や「町の学校」をテーマに細内信孝さんの講演会等を行いました。第2部の表彰式は、地域活動への貢献や福祉作文の優秀作文など、本会から感謝の気持ちを伝える場となりました。ここでは表彰の方々を紹介します。

（順不同・敬称略）

社会福祉功労者の表彰・感謝

1　表彰

◇社会福祉功労者

長谷川光男、紺野浩一、宇田加代子、大山茂、澤田けい子

2　感謝

◇多額寄附者

石原美枝子、安楽寺写経と勤行の会、安楽寺春彼岸会参加者一同、河西工業福祉協議会、カトリック茅ヶ崎教会バザー委員会、寒川町ゴルフ協会、寒川ロータリークラブ、井出歯科医院患者さん有志

3　神奈川県社会福祉協議会会長表彰（伝達）

髙田綾子、伊東直美

4　神奈川県社会福祉大会受賞者（報告）

養護老人ホーム湘風園　接遇ＧＯチーム

5　福祉作文優秀作品

◇小学生の部

大村拓海、鈴木京華、井上遼海、池田堅生、中野比那、村越琉伍、藤﨑太河、福岡洸輝、太田一馬、飯田湊、志村悠晴、木村心穏、古越彩那、石黒聖也、越水風翔、森岡達也、内田皓太、宮下紗衣、井上大志、井上光彩、鈴木由太

◇中学生の部

山上結奈、鳥海琴音、増田裕香、水瀬貴星、北村駿人、印東優海、荒金春香、甲晴佳、三浦菜津美、桐谷希実、中丸夕莉香、古谷美唯菜、石橋楓、平原幹生、山下詩穏、角綾香

※神奈川県福祉作文コンクールで町内から2名が入選しました。おめでとうございます。今後も福祉体験などをきっかけに、身近にある福祉を感じてほしいと思います。

【優秀賞】印東優海さん（旭が丘中学校）

【準優秀賞】北村駿人さん（旭が丘中学校）

本年度の福祉作文の概要

小・中学校の児童・生徒の皆さんを対象に毎年募集している福祉作文ですが、今年も多くの応募がありました。選考は大変難儀しましたが、応募作品577編の中から小学生21編、中学生16編の合計37編の優秀作文が選ばれました。次ページからその一部を紹介します。

また、福祉作文集が完成しました。本会窓口で配布しています。

小学生の部

福祉体験を通して

・県コンクール応募

旭小学校6年　井上　遼海

私は、福祉の体験を通して、コミュニケーションの大切さを知りました。障害者やお年寄りと生活したり、関わったりする上でとても欠かせないと思いました。

私が学校で体験したものの中で印象に残ったものは、二つあります。一つ目は、手話体験です。手話体験の時に、聴覚障害者やボランティアの人たちがやってくださった劇で、避難所の場面がありました。その中で、お弁当を配る時にアナウンスが流れました。一般の方たちは、アナウンスが聞こえお弁当がもらえましたが、聴覚障害者は、アナウンスが聞こえず、食べることが出来ませんでした。その後、聴覚障害者がお弁当を食べることができた劇もやりました。その時は、「お弁当」という札を立てました。この二つの劇を見て言葉を言うだけでなく、相手に伝えることの大切さを知りました。

二つ目は、アイマスク体験です。アイマスクをつけて、友達とペアになり、学校の中を歩きます。この時、ろう下や教室などの平らな所だけでなく、階段の上り下りもしたので、私は、とても怖かったです。でも、ペアの友達が、「もうすぐ、階段上るよ。」などと声をかけてくれたので、怖さが少し和らぎました。この体験の後、いろいろ教えて下さったボランティアの方の話がありました。この時、「言葉は、とても大切です。」とおっしゃっていました。普段から親や年上の人にもよく言われますが、これを聞き、コミュニケーションの大切さが分かりました。

私は、耳の不自由な人といっしょに生活をしています。完全に聞こえないわけではありませんが、その人は、補聴器をしています。補聴器をしていない時は、耳もとで話しかけています。このようなことも、障害者と接する上で大事だと思います。

以上のように、コミュニケーションは、とても大切です。ただ伝えるだけではなく相手にわかりやすいように伝えるのが重要です。しかし、残念なことに、ニュースでやっているように「障害者はいらない」などと考える人がいます。私は、そのような人たちにも、コミュニケーションの大切さはもちろん、障害者も一人の人間として大切な存在だと、分かってもらいたいです。これから生活していく中で、様々な人と接することは欠かせません。相手を大切に想い「言葉」が伝わるようなコミュニケーションをとっていきたいです。

会話ゼロの深いキズナ

・県コンクール応募

南小学校六年　木村　心穏

私は、今の小学校に転校する前の学校で、支援学校と交流していた事があります。その支援学校とは、道路を一本はさんでとなり合っていました。なので、四年生は毎週火曜日の昼休みに支援学校の子達と遊びながら交流していました。また、学校全体では、支援学校の子達や先生達を招待して、夏は体育館で一緒におどったり、歌ったりしました。秋は五年生と六年生の手作りのゲームや出し物を、一年生から三年生は自由に回り、四年生は支援学校の子と一緒に楽しみます。一年生から三年生の時は、私は五年生と六年生が作ってくれるゲームや出し物を楽しみにしていただけでした。

四年生になり交流が始まると、火曜日が楽しみになりました。けれど最初は、一年間一緒に交流する子の事がよく分からず困りました。なので、支援学校の先生にその子の好きな遊びやキャラクターを教えてもらいました。走ることが好きと分かったら、一緒に走りました。好きなキャラクターが分かったら、手紙に描いてあげました。すると、うれしそうに笑ってくれて、私もうれしくなりました。交流していくうちに、手をつないでくれたり、「またね。」と手を振ると、手を振ってくれるようになりました。とてもうれしかったです。

五年生になり、交流も終わりました。交流した後の夏の集会は、今までと、ちょっと違うように感じました。秋も同じです。「今年の秋は、私が遊びを考えるんだ。」と思うと、ワクワクしたり、ドキドキしました。そして、沢山交流した経験を生かして、支援学校の子達はどんな遊びならルールが分かり、楽しむことが出来るかも考えました。私は「交流していた男の子が来るかな。」と思いながら、班で輪投げを作りました。ダンボールにペットボトルをくっつけて、輪っかをペットボトルに向かって投げる、という物でした。色水をペットボトルに入れたり、台のダンボールに絵を描いたりして工夫しました。とても人気で、長い列ができて忙しかったです。支援学校の子も、楽しそうに遊んでくれました。

このような沢山の思い出も出来ました。支援学校との交流では、会話が出来なくても、一緒に遊んだり、活動することで絆を深める事は出来ると学びました。支援学校との交流は、いい経験になったと思います。

中学生の部

人間メガネ

・県コンクール応募

寒川中学校三年　鳥海　琴音

この世の中には、健常者と呼ばれる人と、障害者と呼ばれる人がいます。では、健常者と障害者の違いとは何でしょうか。

辞典などで、健常者と引くと

「日常生活行動に、支障がない人」

と出てきます。障害者と引くと

「日常生活や社会生活に相当な制限を受ける状態にある人」

と出てきました。

では日常生活行動に支障がない人は全て健常者で、支障がある人は障害者というように、解釈してもよいのでしょうか。

世界には、パラリンピックという国際身体障害者スポーツ大会があります。私は、パラリンピックで走っている、佐藤真海さんという方の姿を見て、障害者というイメージが変わりました。

私が小学校六年生の時、全校道徳というものがあり、佐藤真海さんがいらしてくれました。事前に先生からは

「右足がない」

ということを聞いていました。私は足がない人など見たことが無かったので、どんな人が来るのか怖さでいっぱいでした。しかし、体育館からたくさんの拍手で入場してくる佐藤真海さんは、笑顔がステキで、右足もあり私と同じように歩いていました。しかし、ズボンをまくったその下には、人間の足にそっくりな足がでてきました。義足です。その瞬間、同情してしまいました。しかし、紹介ＶＴＲで見た、パラリンピックで走っている姿は、足が義足とは思わせないような走りで、走り終わった後の顔は達成感に満ちあふれていました。佐藤真海さんという人は、さっきまで同情していた障害者だったけれど、その走りを見たあとの私には、私と何も変わらない健常者に見えました。佐藤真海さんは義足というものと、足をなくしてから支えてくれた家族や友達という人達がいたからこそ、こうやってパラリンピックというものに出て走れているのだと思いました。

このように、何かしらの支えがあれば、障害者も、健常者と同じように生活することができるのです。

私は目が悪いです。裸眼での生活は不便で危険です。しかし、そんな私には、メガネがあります。メガネがあれば、私は何の不自由なく生活が出来ます。もし障害者が少し生活に不便を感じていたら、メガネの度を少し上げるように、だれかが少し手伝ってあげるのはどうでしょうか。たくさん不便に感じていたら、たくさんメガネの度をあげるように、たくさんの人が手伝ってあげるのはどうでしょうか。何の為に地球上にたくさんの人がいるのか。それは、一人の困っている人に対してたくさんの人が手伝ってあげる為であるのです。

これからは障害者だって、人間メガネを使えば、不自由なく生活できます。だれかを頼り、だれかを支えることで、二つの分かれている言葉が一つのまとまっている言葉になる日が来ることを私は願っています。

介護について

・県コンクール応募

旭が丘中学校三年　北村　駿人

福祉と聞いて、みなさんは何を思い浮かべますか？僕は介護です。介護とは、身体が不自由な人、病気になった人、お年寄りや赤ちゃんなど、僕たちが普通だと思っている身の回りのことや自分のことが出来なくなった時に助けてもらうことです。

日本は現在、総人口に占める六十五歳以上の人口が約二十六パーセントにも及びます。単なる高齢社会ではなく、超高齢社会に突入しているのです。時代の変化に伴い、二世代同居や三世代同居が少なくなり、夫婦のみで構成される核家族化が進んでいます。そのうえ少子化や独身の人も増え、この先、長寿社会になった時、介護できる家族が少なくなるという心配がでてきます。しかし長寿社会ということは、平和で豊かであるという表れでもあります。

僕の家は、両親と姉の四人家族です。すぐ近くに、母方の祖父母の家があり、二人で暮らしています。祖父母は共に七十歳を過ぎていますが、今も元気に現役で仕事をしています。その祖父母の家では、以前、曾祖父母も一緒に生活していました。しかし曾祖父は八年前に九十三歳で、曾祖母は五年前に九十五歳で亡くなりました。二人とも大往生でした。曾祖父母とも高齢だったということもあり、やはり介護を受けていました。自宅で介護ができるように、介護ベッドやポータブルトイレ、車椅子など色々と祖父母の家には介護用品が置かれていました。主に祖母が介護をしていましたが、祖母ができない時には、母が手伝いに行っていました。食事ひとつにしても、みんなと同じではなく、食べやすいように柔らかくして細かくきざんだり、とろみをつけてのどにつかえないよう色々と配慮していました。その他にも、体を拭いてあげたり床擦れができないように体の向きをかえたり下の世話まで、見ていて大きな赤ちゃんのようでとても大変そうでした。在宅での介護だけではなく、特別養護老人ホームのデイサービスやショートステイも利用していました。そのとき僕たちが出来たことは、車椅子を押したり、そばで話をすることぐらいでした。耳も遠くなり、いま思えば、聞こえていたのかどうかさだかではありませんが、僕と姉のたわいのない話をニコニコしながら聞いていました。帰りぎわには「ありがとう。また来てちょうだいね。」と言って、手を振り見送ってくれたのを覚えています。介護とは、何かをしてあげることだと思っていましたが、何もしなくても、そばにいて話をしたり、聞いてあげるだけでも、介護になっているのかなと思いました。

以前曾祖母は、介護をしている母に「子どももいて忙しいのに、こんなことさせちゃって申し訳ないね」と言ったそうです。介護は「する人」だけではなく「受ける人」も精神的につらいものがあることに気付きました。だから介護をすることよりも、相手の立場になって、相手の気持ちを一番に考え行動することが大事ではないかと思います。介護を受ける人も人間です。一人一人個性があります。なのでその人に合わせた介護をする必要があると思います。介護を受けている人が自然に助けてもらっていると思えるような介護をしてあげることが理想の介護なのかもしれません。

以前は、介護は家族や兄弟といった身内が行うことが普通だったと思います。しかし今は、親の面倒を見ない、子どもの育児を放棄する、そのような家族関係も珍しくない時代です。やむを得ない事情で、家族が介護できないケースもあると思います。その時は、ご近所の方や地域の方、専門家の方が精神的な心の支えになってあげられるよう、社会も積極的に取り組んでいかなければならないと思います。

今は元気な僕の祖父母も、もしかすると将来介護を必要とする日が来るかもしれません。自己満足な介護ではなく、祖父母が本当に望んでいる介護ができるといいなと思っています。介護を「する」「される」という立場にはなりますが、それを意識せず、自然に行動できることが介護につながっていたらいいなと思いました。

僕はまだまだ未熟者です。この先いろいろな経験をしていくと思います。どんな時でも相手の気持ちを汲んだ行動ができるよう心がけていきたいと思いました。